



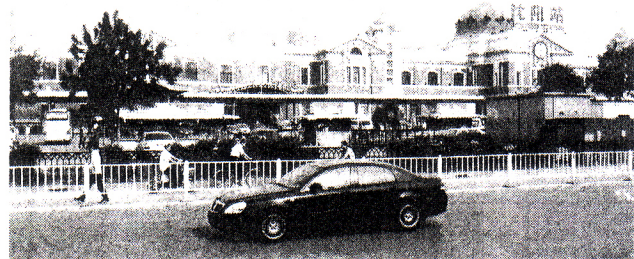
ホテルの窓から見た瀋陽の朝

今回は旅行社のツアー「瀋陽、旅順、大連」中国東北ハイライト四日間」で私が生まれた街、旧満州・奉天（現・瀋陽）を訪ねた。満州時代の記憶はまるでないが、自分がどんな所で生まれたのか知りたかった。手元の「引き揚げ者の外地における居住状況・引き揚げの状況等に関する申立書控え」には次のようにある。昭和十五年一月、満州国奉天市白菊町三〇番地で出生。翌昭和十六年チハルに、昭和十九年には鞍山に転居し、そこで終戦を迎えた。日本に引き揚げたのは昭和二

十一年八月である。これから考えると記憶にわずかに残る満州時代のことは終戦前後の鞍山のことと思われる。それでも「奉天」という言葉が頭に強く刻まれている。瀋陽と呼ばれる旧奉天には福岡空港から二時間十分余りで到着した。中国・東北地方最大の都市・瀋陽は何と人口が七百二十五万人の大都市。赤レンガの二階建ての部屋の中央にベチカを連想した私の奉天とは全く異なる印象を受ける。

は忘れがたい街だが、私の記憶の奉天とは大違いであった。奉天は最初、ロシアによって開発され、駅を中心に放射状に広い道路がある。奉天駅は東京駅を模して赤いレンガ造り。今も当時の面影をそのまま残している。なぜか、この駅だけが私の頭の中の奉天と一致する。交通規制が厳しくて車中からしか奉天駅を見られなかった。しかし通り過ぎるわずかな間に母を思い出したの

生まれた街・奉天

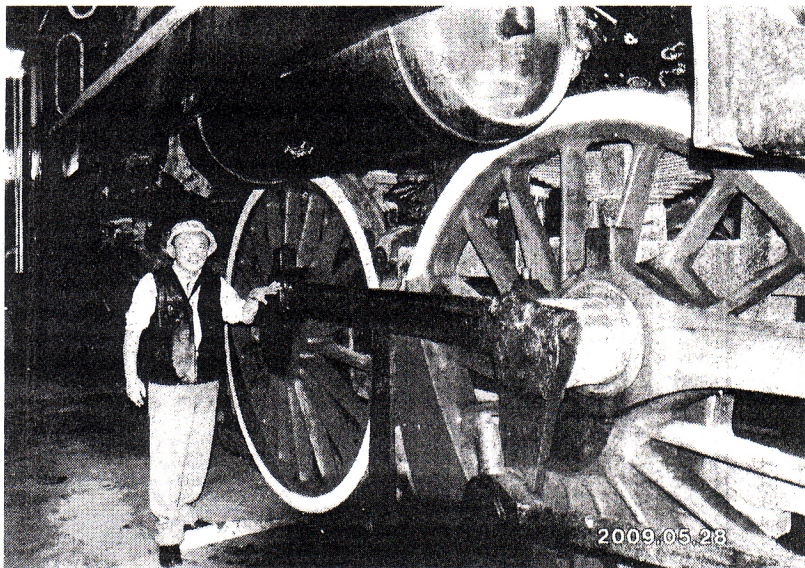


東京駅そっくりの瀋陽駅

清朝発祥の地で、北京に遷都するまでは盛京と呼ばれた。日本が満州国として支配していた当時の拠点で、特に奉天会戦・日露戦争勝利をもたらした地として日本人に

は我ながら不思議に思えた。生まれた地で母親を想う…本能のなせる業かもしれない。「かんちゃんを抱いて、この駅からチハルに向かった時、あなたはまだ一歳だったのよ」という母の声を聴いたように思えた。昭和十六年から住んだチハル。当時「特急あじあ号」が大連

ハルビン間を走っていた。この間の距離は約九百五十キロ。終点ハルビンからチハルまではさらに北に相当進まねばならない。この間、母にずいっと抱かれていたのだろうか。間違いなく自分の生まれた地を訪れたことを実感した。（元山口放送取締役ラジオ局長）



この「あじあ号」に乗ったに違いない

2009.05.28